

中国残留日本人孤児から学んだこと(第7回)

血と国

浅野慎一

※兵庫県AALA連帯委員会『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ(兵庫県版)』

2018年11月号掲載記事に若干加筆しました。

残留孤児は1945年以来、生き別れになった日本の肉親との再会を待ち望んでいた。特に1972年、日中国交が正常化した後は、北京の日本大使館や東京の厚生省に手紙を出したり、日本に里帰りする残留婦人に頼んだりして、懸命に肉親を捜した。しかし日本政府は、残留孤児の肉親捜しにほとんど協力しなかった。

こうした日本政府の対応に、残留孤児や日本に住む肉親から多くの批判が寄せられた。

そこで日本政府は1981年、残留孤児を日本に招いて肉親を捜す「訪日調査」によりやうく着手した。

年配の読者は当時、残留孤児の訪日調査が新聞やテレビで盛んに報道されたことを記憶しておられるだろう。残留孤児と実父母が40～50年ぶりに奇跡の再会を果たし、涙する場面を覚えている方も少なくないだろう。当時、多くの日本人は「残留孤児が肉親と再会できて、本当によかった。これで残留孤児問題も一段落」と感じていた。

しかし実際には、訪日調査の裏側には、数々の問題が渦巻いていたのである。

まず、訪日調査はあくまで「肉親を捜す」ための調査だ。だから残留孤児本人が信頼性のある認定資料、または手がかりになる証拠品を提出しなければ、調査に参加できなかった。しかしこれは、残留孤児にとって針の穴を通り抜けるような難関である。なぜなら、具体的な資料や証拠がある孤児は訪日調査を待つまでもなく、自力で肉親を見つけることができていた。訪日調査を必要としていたのは、資料や証拠品が少なく、自力では肉親にたどりつけなかった人々だ。多くの残留孤児は、「資料や証拠がない」という理由で何年間も、ときには10年以上も、訪日調査への参加を認められなかったのである。ある孤児は「敗戦時、0歳で道端に捨てられていた私に資料・証拠を出せというのは、あまりに理不尽だ。逆に日本政府が実父母についての資料・証拠を、私に提示すべきではないか」と語る。

参加できる残留孤児が少ないため、訪日調査は1981年から1999年まで19年もかけて、小規模・五月雨式に実施されることになった。その間に、残留孤児の身元情報を語ることができる数少ない高齢の証人や実父母は、次々に亡くなっていった。しかも訪日調査の期間は、わずか約2週間だ。中国側の行政担当者は、「まず残留孤児であることを幅

広く柔軟に認め、その上で、肉親の情報が豊富な日本に長期滞在または永住帰国させ、継続的に肉親を捜すべきだ。また残留孤児よりも、実父母など日本の肉親の方が詳しい情報・記憶をもっているのだから、日本の肉親を訪中させ、中国の心当たりの地域で残留孤児を捜させるべきだ。肉親や証言者の高齢化を考えれば、肉親捜しは『時間との競争』だ。大型船をチャーターして、短期集中で大規模な肉親捜しを行うべきだ」とも語った。しかし日本政府は、そのような積極的な取り組みをせず、細々と五月雨式に訪日調査を続けた。

その結果、訪日調査での肉親判明率は3割程度にとどまった。しかもその3割も、事前の自主調査で肉親が判明し、訪日調査で最終確認をしたケースを多く含む。純粋に訪日調査だけで肉親が判明した孤児は、一層少なかった。テレビや新聞で大々的に報道された「涙の再会」は、このほんのわずかなケースにすぎない。大多数の残留孤児は訪日調査への参加を容易に認められず、ようやく参加できても肉親との再会は果たせなかった。彼・彼女達は、「日本政府はもっと早く、大規模に調査を実施すべきだった。また日本国内で調査を行い、我々（残留孤児）にその情報を知らせるべきだった。そして訪日調査の後も、継続的に肉親捜しを行うべきだった」と憤りを深めていた。しかし、このような残留孤児の悲痛な声は、彼・彼女達が日本語ができないこともあり、日本のマスメディアではほとんど報道されなかった。逆に肉親が判明し、抱き合って嬉し泣きをしている残留孤児の場面はテレビや写真で伝えやすく、中国語での取材も不要なので、繰り返し報道された。

日本政府はなぜ、大規模な調査を早期に行わなかったのか。理由は、主に2つある。一つは、残留孤児の発生や肉親捜し・家族との再会が日本政府の公的責任ではなく、個々の家族のプライベートな「私事」だとみなす立場（民事不介入）を堅持するためだ。もう一つは、肉親関係（戸籍）が判明しなければ、残留孤児が日本人だということも最終的に認定できないとの立場（血統主義）の堅持だ。残留孤児が個々の家族の「私事」ではなく、日本政府の政策によって生み出されたという事実をはっきりと認め、また残留孤児を早期に帰国させ、日本で継続的に肉親捜しをしていれば、肉親と再会できた孤児はもっとずっと多かっただろう。またこれは日本政府だけの責任とは言い切れない。

「まず肉親を捜し、再会させてあげるのが自然の情」、「両親が日本人だからこそ、子供も日本人と立証できる」。少なからぬ日本人の心の中にあつた（今もあり続けているかもしれない）「常識」が、残留孤児の肉親捜しを阻んだ側面があることを、私達は忘れてはならない。